

ニューブリテン西岸の防備は松田支隊長の指揮する才六十五旅団（歩兵才百四十一聯隊基幹）、歩兵才五十三聯隊主力、砲兵一大隊、搜索才五十一聯隊等がツルブ（グロセスター岬附近）、ブツシング及ウムボイ島を防備していた。ツルブには飛行場があり防備の重点は同地に指向された。

才十七師団の今一つの歩兵聯隊である才五十四聯隊の聯隊長は部下一大隊の外才三十八師団の歩兵一大隊及砲兵一大隊を指揮してガスの守備に當っていた。

マールカス反撃 敵のマールカス上陸当時、敵はボーゲンビル島北方のブカ島の空襲を激化し同方面とも新企図を有するやに判断されたが幸ひマールカス岬方面の上陸兵力は比較的小数であつたので才八方面軍

0597

及南東方面艦隊は先づ速に此の敵を撃滅する方針を樹て、航空攻撃の火蓋を切つた。連合艦隊も亦、トラツクに進出待機中の約六〇機を南東方面に増加した。

トラツクよりの増援を得て戦國機百数十機、艦爆約五〇機となつた海軍航空部隊は十五日早朝より反撃を開始し、十六日、十七日及二十一日と五回に亘り攻撃を加へた。才四航空軍も亦十五日より三回に亘つて出撃し海軍の反撃に策心した。此等の攻撃は多大の戦果を収め、敵は上陸兵力約一師団の二分の一を失つたことが敵側の放送によつて明かにされた。

一方地上部隊の奮戦も目覚ましいものがあつた。才八方面軍は松田支隊の一大隊をブツシングより転用して此の攻撃に参加せしめた。此等

兵力は総計二大隊半の弱勢乍ら、小森少佐の指揮の下に、敵を壓迫してその地歩拡大を阻止した。五三

斯くしてマカス岬附近の敵撃滅の希望は実現するかに見へたが、敵は我航空反撃を封ずるにパウルの連日空襲及機動部隊によるニューアイルランド島方面陽動とを以てした。我海軍航空は二十二日以後パウルに於ける邀撃戦に忙殺せられ、マカスに対する攻撃は夜間少数機を以てするの已むなきに至つた。地上に於ても小森支隊は逐次敵の壓迫を受けつゝあつた。

ツルブの失陥　斯くする内、敵は十二月二十六日ツルブヘグロセスター岬一に対して矢継早の上陸を開始した。陸海軍航空部隊は同日反撃を行つたが二十七日以後は攻撃の続行不可能となつた。即ち同日

0599

より敵のラバウル空襲は愈々激化し、我海軍航空は完全にラバウルに釘付けされた。又孝四航空軍は十五日以来の攻撃に依り爆撃機の殆ど全部を失ひ二機を余すのみとなつていた。

今や、ツルブ地区の戦國は地上部隊にその望が懸けられることゝなつた。松田支隊は敵の上陸を知るや直ちに水際に邀撃したが敵は遂に水際附近にその地歩を獲得した。茲に於て松田支隊はその全力をツルブ地区に凝結し、先づナタモ附近の敵を撃滅したる後飛行場を奪回する方針の下に攻撃するに決した。攻撃はブツシグより招致せる歩兵才百四十一聯隊主力の到着を待つて、一月三日黎明三角山に重点を指向して開始された。各部隊の取圍により同日一度は三角山の奪取に成功したが敵の猛反撃の爲め同高地の保持は困難となつた。爾後三角山

の争奪が地上戦鬪の焦点となり、松田支隊は極力之が奪取を図つたが、  
形勢は遂次我に不利となつた。一月中旬末頃には致命的な弾薬糧食の  
欠乏が訪れた。

五五

才八方面軍はツルブ方面に対する今後の補給確保の手段の無い状況  
に鑑み、一月二十日西部ニューブリテンの確保作戦を断念し、才十七  
師団に対し、ツルブ附近兵力を中部ニューブリテン方面に撤収し、且  
自今タラセア及ガスマタ附近の嬰域に於て来攻する敵を撃破して極力  
持久を策すべきを命じた。斯くして松田支隊は一月二十三日東方に向  
つて退却を開始し西部ニューブリテンは完全に敵手に落ちた。

ダムピール西岸の崩壊 昭和十九年正月はダムピール西岸に於て  
も極めて陰惨なものであつた。敵はツルブ上陸の一週間後即ち正月二

0601

日、ダムビール西岸の奥深く、グンビ岬（サイドル）に対して新上陸を行つた。グンビ岬は、当時才十八軍がダムビール西岸最後の要衝として確保せんとしてつゝあつたシオ地区とマダン地区との概ね中間に當つてあり、此の地点に対する版の上陸はシオ地区確保作戦をその根底より崩壊せしめるものであつた。

此の状況は、才十八軍としては予てより憂慮していたところのものであるが、当時ダムビール地区作戦に徹底的努力を払はなければならなかつた南東方面全般作戦の必要上此の危険を甘受していたのであつた。さるにても、此の上陸により才十八軍戦闘力の約半部が約三〇〇軒の東方に於て、その基地たるマダンから遮断されてしまつたのである。当時才二十師団はフィンシハーフェン地区よりシオ地区に退却中

であり、才五十一師団主力は未だキアリ地区に於てマダン方面に對する撤退を準備中であつた。又軍司令官は作戦指導の爲シオ地区に在つた。

此の状況に對し南東方面艦隊は才十八軍をしてグンビ岬附近の岬を東西より挾撃せしめる意見であつた。然し当時の陸海軍航空部隊はツルブ作戦協力さえ不可能な状況にあり、才十八軍の挾撃作戦を支援し得る立場になかつた。又西方のマダン地区より即刻に攻撃に使用し得る兵力の余裕もなかつた。東方に孤立した才二十師団及才五十一師団に對しては先づ何よりも補給を維持することが必要であるが到底確算はなかつた。仍て才八方面軍司令官は即日発令して才十八軍のシオ方面ダムビール西岸要域の確保任務を解き、その兵力をマダン附近に転

進せしめる如く処置した。

茲に於て才十八軍司令官は阿兵團をして、グンピ附近の敵を迂回し、フィンステル山系地斜面の密林地帯を通過してマダン地区に転進せしめた。サラワケツト越転進及フィンスハーフェン作戦によつて疲労を癒して遠していた陸海軍將兵約一三〇〇〇は患者約三〇〇〇を擁しつゝ、一月中旬末、約三〇〇斤の苦難の転進の途に就いた。ラバウルよりは潜水艦により危険を冒して糧食を輸送して転進を援助した。才四航空軍亦糧食を空中投下して餓とした。此等により転進將兵はガリ出発時平均約三立の米の補給を受けた。然し行程三〇〇斤の転進には少くも一ヶ月を要する見込であつた。

マダン地区才一線となる

シオ地区の失陥により、才十八軍にと



つては、今やマダン地区が才一線となつた。十二月以来マダン地区に對する空襲は激化し、敵魚雷艇の活動を活潑となつていた。グンピ上陸以後は敵海軍はマダンに對し艦砲射撃さえ行ひ上陸企圖もあるやに判断された。仍て才十八軍は才四十一師団のウエワクよりの前進を促進しマダン地区の防備を速急に固めしめた。

一方マタン地区は他の二つの使命を果さなければならなかつた。それはマダン南方フィンステル山系の守りとシオ地区より転進する才二十及才五十一師団等の収容とであつた。然し此の兩目的の爲めに使用可能なのは中井支隊のみであつた。仍て才十八軍は当時フィンステルに於て濠洲才七師団に對戦中の中井支隊長をして其の兵力の約半部を指揮して急遽ピリアウ方面に転進しシオ方面よりの転進部隊の収容に

0605

任せしめた。中井支隊は直ちに急進して一月中旬グンビ附近の敵に胸接し、同月下旬より二月下旬の間敵次に亘つて敵に邀戦を交へたが悉く敵を破り、敵をしてグンビ附近の橋頭堡内に蟄伏せしめた。

此の間フィニステル方面に於ては濠洲才七師団は一月十九日以来果敢攻勢に出で、歡喜嶺陣地は遂に敵中に委するの已むなきに至つたが歩兵才七十八聯隊長の指揮する同聯隊の約半數の敢闘に依り後方陣地線を死守して軍全敵の作戦を容易ならしめた。

兎もあれ、昭和十八年九月二十二日フィンシハーフェン地区に始まつたダムピールの邀戦は約四ヶ月の後シオ及ツルブの失陥を以てその終止符を打ち、一月下旬にはダムピール海峽は完全に敵手に落ちた。

六 マーシャルの失陥とトラックの無刀化

八一

マーシャルの防備 先きにボーゲンビル島の無力化あり、今又ダムピールの失陥あり、今や国防前衛線は相次で崩壊しつゝあつた昭和十九年一月末頃、連合軍の猛襲は国防前衛線の東縁たるマーシャル群島にも加へられた。即ち昭和十八年十一月下旬ギルバートを占領しマーシャル方面に對する次の作戦を準備中であつた。米中部太平洋艦隊は約二ヶ月の準備の後、再び攻勢を開始して来た。

此の方面の防備は才四艦隊麾下の才六根拠地隊、才二十二及才二十四航空隊並に才九五三航空隊が之に當つていた。才二十四航空隊及才九五三航空隊はギルバート作戦に際し、夫々千島及南西方面より転用せられた部隊であるが、其の後引継ぎマーシャル方面に止まつて

0607

いたのである。才四艦隊は此等航空部隊の戦力強化を図つたが、前年の十二月五日の空襲によつて一挙に約六五機の被害を受ける等、戦力強化は進んでいなかつた。一方連合艦隊としても、敵の主反攻は依然ラバウル方面であるとの判断の下に、敵のマーシャル上陸直前の一月下旬に、とつて置き、母艦航空部隊の最精鋭約一〇〇機を南東方面に投入したばかりであつた。斯くして敵のマーシャル来襲時、早速反撃に使用し得る航空機数は約一〇〇機に過ぎなかつた。

地上防備も亦不十分であつた。才六根拠地隊麾下の警備隊が、ケゼリン、タロア、ウオツゼ、ミレ、エニウエタツクヘブラウンに各一隊宛配置されていたが、此等の島はギルバートと同様に地積狭く且平地で防禦施設の構築に適しなかつた。昭和十八年十月下旬発令の陸軍

の海上機動旅団及南洋才一乃至才三文隊も此等諸島に分散配置されたが、その多くは十九年一月中下旬の間に進出したばかりで地上防備は未だ固まつていなかつた。

敵の奇襲 斯る状況の裡に、敵機動部隊は一月三十日早朝突如マ  
ーシャル群島に來襲してケゼリン、ルオツト、ウオツゼ等の我航空主  
要基地を攻撃した。ギルバート方面の基地航空部隊も亦之に呼応して  
攻撃を強化した。敵の攻撃は三十一日及二月一日を同様に続けられた。  
我航空部隊は全く奇襲を受けて反撃の余裕すらなく、航空機の殆ど全  
部が地上に於て破壊され几帳のみが辛うじてトラックに退避するに止  
まつた。敵の主反攻は南東方面であると判断していた連合艦隊は勿論  
警戒不十分の現地部隊も敵の奇襲を受けた格好となつた。

0609

然も敵の奇襲は時機についてのみでなかつた。敵のマーシャル上陸は先づ南部マーシャルに対して行はれるであらうと言うのが従来の一致した判断であつたが、敵は上陸地点についても我意表を衝き、二月一日朝より猛烈な艦砲射撃の掩護の下に、マーシャルに於ける我心臓部たる北部のケゼリン及ルオツトの両島に対し臆面もなく上陸を開始した。

ケゼリン及ルオツトの失陥　ルオツト島には才二十四航空戦隊の司令部があつた。総兵力は約三、五〇〇を算したが、大部は航空部隊の人員で地上戦闘兵力としては才六十一警備隊の約四〇〇名が居るに過ぎなかつた。然し地上戦闘は我戦闘兵力の如何に關係なく急速に進行し、三十日よりの敵の砲撃に依つて敵の上陸前既に大部の人員が死

傷し防禦施設は破壊されていた。二月二日敵は易々と同島を占領した。

六五

ケゼリン島には才六根拠地隊司令部及才六十一警備隊主力その他合計約三七〇〇名の海軍部隊と、陸軍の才一海上機動旅団の一部及南洋才一支隊の一部計約二二〇〇名が居り秋山海軍少将が全般の指揮に当たっていた。此等守備隊は勇戦して敵の二月一日の上陸は撃退した。然し二日の強行上陸は遂に制し切れず爾後は壮烈な地上戦となつた。敵國は四日迄続いたが同日夕刻頃迄には守兵の大部戦死し、守備隊も終りを告げた。かくして、開戦前から、「日本海軍の海上決戦の契機は敵のマレーシャル来攻時に」として長く研究準備されて来た焦点の襲地も大なる抵抗を行ひ得ずして敵手に委して了つた。

0611

トラツク空襲 我マーシャルの前衛線を殆ど瞬間的に崩壊せしめ  
た敵機動部隊の猛威は矢継早に相対国防線上の要衝たるトラツクに加  
へられた。

トラツクは南東方面敵反攻開始以来既に長く連合艦隊司令部及水上  
部隊主力の所在地であつたが、マーシャルの失陥に伴ひ連合艦隊司令  
長官は敵の空襲を予期して、二月十日水上部隊を内地及パラオ方面に  
撤退せしめ、自らも亦將旗をパラオに移した。従つて同地区に於ける  
最高指揮官は自動的に才四艦隊司令長官小林中將となつた。

当時トラツクには小林中將指揮下の才四艦隊、南西方面艦隊所屬の  
航空兵刀及陸軍才五十二師団三刀の外に、トラツクに於て訓練中の南  
東方面艦隊所屬の航空兵刀があり指揮系統は複雑であつた。而して才



四艦隊司令長官が未だ新遊撃部署を殆令しない内に、二月十七日早朝  
敵機動部隊の来襲となつたのである。更に事態を悪くしたのは哨戒不  
備の為に我方は戦術的奇襲をも受けた結果となり、飛行隊員は当日外  
出を許されていたことである。

指揮系統の不明確と各部隊の出動準備の不備とは必然的に防衛戦闘  
の著しい混乱を惹起した。その日トラックには各飛行隊所属の飛行機  
約一三五機があり、その内七〇乃至八〇機は出動可能な状況にあつた  
のであるが遊撃は果々しくゆかなかつた。十七日の空襲により我方の  
突撃可能な飛行機は戦國機一、艦攻五を残すのみとなつた。

敵は翌十八日も空襲を反覆するの外艦砲射撃をも実施するに至り、  
トラック在泊の艦船並に陸上施設は甚大な損害を被つたが、同日損害

六七

0613

の累計は次の通りであつた。

艦艇 沈没九隻（約二四万吨）、損傷九隻（約三六万吨）

特殊艦船 沈没三隻（約三二万吨）

輸送船 沈没三一隻（約一六一万吨）

飛行機 二七〇機（飛行隊所屬以外の一三五機の補充機を含む）

死傷 約六〇〇

右の外才五十二師団のオニ次輸送部隊はトラック西方洋上に於て攻撃を受け、輸送船二隻沈没、人員一〇〇の戦死を生じた。

ラバウルの無刀化、トラックの惨害は此の数量的にのみ見ても莫大なるものであり、一撃に斯くの如き損害を生じたことは従来の激々の戦例にも無いことであつたが、それ以上に深刻であつたのはトラック

の無刀化が他方面に与へた影響である。

總對國防廳上の要衝トラツクが今や敵の蹂躪するところとなつたのを知るや、連合艦隊司令長官は直に在ラバウル航空兵力のトラツク転用を命じた。斯くして南東方面には二十日以後一機の海軍航空機も存在しなくなり、ラバウルはその戦略的威刀の大部を喪失した。南東方面全般の作戦も、従来の航空を主兵とする作戦から陸上兵力のみを以てする作戦に転換せざるを得ない結果となつた。

陸海軍大臣の統帥部長兼任　　トラツク空襲は又東京にも大きい影響を与へずにはおかなかつた。即ち二月二十一日には東条總相の参謀総長兼任、島田海相の軍令部總長兼任が発令された。陸軍省は陸軍大臣が参謀總長を兼ねるのでなく、陸軍大将東条英機の人格に於て参

謀総長に親補されたのであると説明したが、兎も角陸軍大臣が同時に参謀総長になつたのは明治二十二年参謀本部の独立以来最初のことであつた。

東条陸相がガダルカナル作戦以来船舶問題に端を発して、兎角統帥部の要求が強過ぎ、為に政略が引きずられ勝であると感じていたが、トラツク空襲を契機として人事的措置によつて統帥と國務との節調を図ろうとしたのであつた。

陸海軍大臣の統帥部長兼任は唯でさえ多忙な東条大將及島田大將の業務を愈々繁忙にするものであつた。仍て参謀本部及軍令部の二次長制が軍部大臣の統帥部長兼任の併行的処置として採用された。その目的は四大將に対する統帥部面の補佐機関の強化であつた。

ブラウンの失陥　トラック空襲の惨害及影響は前述の通りであるが、此の空襲の眞の目的はブラウン環礁に対する上陸の準備であつた様である。即ちブラウンは一月三十一日以来殆ど連日敵空母機の空襲を受けていたが、二月十八日早朝よりは敵の艦砲射撃が始まり、約一晝夜の猛砲撃の後、敵は翌十九日エニウエタツク及メリレンの両島に上陸を開始した。

当時ブラウン環礁には才六十八警備隊を基幹とする海軍約三〇〇〇及陸軍海上機動才一旅団主力約三〇〇〇の兵力が配置されており、全般の指揮は西田陸軍少将が當つていた。但し両部隊共一月末に漸く現地に到着したばかりで防禦施設の見るべきものは無く、両島の運命も亦自ら明かであつた。斯くして両島は二十四日完全に敵手に陥した。

0617

マリアナ空襲 二月初頭以来マーシャルの占領、トラックの空襲と、次々の成功の勢に乗じた敵機動部隊は更に北上して二月二十三日我が国防線の要衝マリアナを襲った。当時マリアナには日本海軍が昭和十八年七月以来各種の不利を忍び乍ら決戦兵力として整備中の才一航空艦隊（基地航空部隊にして司令官は角田中将）が進出中であつた。即ち当艦隊は整備訓練に約一年を予定されていたが全般の戦況に鑑み二月中旬以降逐次マリアナ方面基地に進出せしめられつゝあつたのである。

敵の来襲に対し我艦隊は計八三機を以て反撃を試みたが戦果の見るべきものなく、却つて空中及地上に於て九四機を失つた。整備途上にあつた才一航空艦隊がその漸戦に於て相当な損害を受けたことは、そ

の不幸なる前途を暗示するかの如くであつた。然し乍ら、それにもま  
して重大であつたのは、中部太平洋方面に於ては、二月下旬早くも敵  
の觸手が我絶対国防圈上の要衝に延びたという事実であつた。

セラバウルの孤立

前衛線確保の最後の努力 トラック、マリアナが次々に敵機動部  
隊の猛威に曝されている頃、南東方面に於ては前衛線の最後線として  
ラバウル、アドミラルティ諸島及マダンを結ぶ線の確保の為に最後の  
努力が傾けられつゝあつた。

トラック空襲に依り在ラバウル海軍航空兵力皆無となるや、才八方  
面軍司令官は、当時西部ニューブリテンより中部ニューブリテンに転  
進中であつた才十七師団をして一挙にラバウルに向つて転進を続行せ

しめて、才三十八師団と共にラパウルの防衛に当らしめる如く処置した。一方ラパウルの東北方の前哨たるニューアイランド島に対しては、予て配置してあつた才三十八師団の一部及独立混成才一聯隊を才三十八歩兵団長伊東中将をして指揮せしめ、海軍の才十四根拠隊と協同して之が防衛に当らしめた。

前備線の西翼たる東部ニューギニア方面の指導に就ては、才八方面軍司令官は、才十八軍をして依然ラパウル方面と密接なる有機的関聯を保持せしめる主義に依り、概ねマダン附近以西東部ニューギニアの要域に於て来攻する敵を撃破して持久せしめる如く二月十七日発令した。

東部ニューギニアの現地に於ては、一月中旬キアリ地区を陥した才



二十及才五十一師団竝に才七根拠地隊は約一月に亘る縦行軍の後、二月中旬頃中井支隊の收容線内に到着しつゝあつた。此等転進部隊の大部分は二月末迄に機動を終り到着人員約九三〇〇を算したが、出発時の人員約一三〇〇〇に対して三七〇〇の損耗であつた。此の損耗はサラワケツト越転進の損耗と共に、ニューギニアに於ける長途の機動が如何に高価な代償を要するものであるかの顯著な例であつた。

然も此等転進部隊を迎へたマダン地区は既に敵上陸の脅威に曝されていた。才十八軍司令官は此等転進部隊をしてマダンを越へて引続き更に西方に機動せしめ、才五十一師団をしてウエワクに於て、又才二十師団をしてハンサに於て夫々戦力の恢復を図らしめつゝマダン地区防衛の後方拠点を形成せしめる計畫の下に逐次配置するところがあつ

た。又才十八軍司令官は駆進部隊の収容に伴ひ中井支隊長をして再び  
フィンステル歡喜嶺方面の作戦を併せ指揮し同方面の急を救はしめる  
と共に才四十一師団をしてマダン及その西北方の海岸線の防備を固め  
させ、ハンサ地区強化も相俟つて着々マダン地区防衛態勢を強化した。

一方才四航空軍はツルブ作戦協力以後戦力著しく低下し、二月初頭  
よりホルランヂヤ以西地区に於て戦力の恢復中であつたが、大本營に  
於ては東部ニューギニア方面に於ける敵の次期進攻はマダン附近に対  
して行はれる算少からずと判断し且敵を洋上に於て撃滅する為には航  
空戦力を集中發揮すること絶対必要なりと認め一月二十七日才二方面  
軍指揮下の軽爆二戦隊を、次で一月三十日更に才二方面軍指揮下の所  
要の航空兵力を一時南東方面に派遣しマダン地区の作戦に協力せしめ

る如く処置した。

アドミラルティの防備と之が失陥　アドミラルティ群島は早くより良好な艦隊泊地として知られていた。又群島の東端のロスネグロス島の飛行場はラバウルと東部ニューギニア間の中継基地として使用されて来ていたが、今や前衛線の最後線たるラバウルとマダンとを繋ぐ重要な線上に立つことゝなつた。

才八方面軍は昭和十八年十一月頃以来、之が防備強化の要を認め、十二月に才十八軍の才五十一師団の一部をバラオに於て再建して投入する如く処置したが再建団の補充員が海没の悲運に会ひ所期のアドミラルティ強化は実現しなかつた。才八方面軍は更にバラオに滞留中の才六師団及才十七師団の補充員を以て歩砲各一大隊を編成して急送す

0623

る如く処置したが是亦敵潜水艦の妨害の爲め実現せず、茲に於て已むを得ずニューアイランド及ラバウルより各歩兵一大隊を割いて一月末より二月上旬に亘り海軍艦艇に試つてロスネグロス島に急送し、昭和十八年四月以来同島に在つた輜重兵才五十一聯隊長の指揮下に入らしめた。南東方面艦隊も亦十二月に才八十八警備隊を送り主としてマヌス島ロンガウ附近の防備に当らしめた。

一方航空協力に就ては、マダン附近の作戦に協力する予定の才二方面軍指揮下の五ヶ戦隊がアドミラリテイの作戦にも協力することに両方面軍間の協定を見、二月下旬頃アドミラリテイの防備は不十分乍らも逐次その形を整へつゝあつた。

然るに敵は、此の度は大爆撃等の前胸れもなく騎兵才一師団の一部

を艦艇に搭乗せしめて二月二十九日ロスネグロス島に対して威力搜索  
的上陸を行はしめた。次で、我反撃の微弱なるを知るや、主力を以て  
船団上陸を開始した。オ二方面軍より協力の航空部隊は反撃の為出撃  
したが天候の関係で戦果を挙げ得なかつた。

ロスネグロス島の守備に任じていた陸軍守備部隊の全力及海軍の一  
部は邀撃に勉めたが力及ずして遂に敵の上陸を許し、ハイン飛行場は  
その日の内に敵手に落ちた。守備部隊は爾後も再三敵を夜襲したが何  
れも失敗し、三月五日の夜襲を最後として攻撃の力を失ひ間もなく外  
部との連絡を絶つた。同島の地上防禦戦闘は三月二十五日頃迄続けら  
れた様であるが大勢を左右することは出来なかつた。

ラパウルの孤立 アドミラルティの失陥がもたらしたものは南東

方面に於ける国防圏前衛線の完全崩壊でありラバウルの孤立であつた。先にトラックの無力化により同方面よりの支援を絶たれていたラバウルは、今又アドミラルティの失陥によつてニューギニアの連鎖をも絶たれた。反面敵はアドミラルティの攻略に依つてダムピール海峡突破を結実させ、今やニューギニア北岸の如何なる地点にも跳躍的作戦を行ひ得る立場に立つた。

茲に於て大本営はニューギニアの才十八軍及才四航空軍を西部ニューギニアの絶対国防圏方面に転用して同方面の作戦に参加せしめるに決し、三月十四日発令して、阿軍を三月二十五日以後才二方面軍の隷下に入らしめる如く処置した。此の命令と共に発令された才八方面軍の新任務は、海軍と協同し、所在戦力を以てラバウル方面要域を確保

八二  
し以て濠北より中部太平洋に亘る作戦を容易ならしめるにあつた。斯くしてラバウル地区に於ては終戦に至る迄の現地自活による長期持久戦の準備が<sup>始</sup>まつた。ラバウル及ニューアイランド島地区に孤立した兵力は陸軍（才十七及才三十八師団基幹）約七五〇〇〇（勞務者を含む）、海軍約四〇〇〇であつた。

想へば南東方面作戦は先づ海軍も之に参加し、昭和十八年八月頃迄は日米の主戦場として、又爾後は絶対国防圏の前衛線として、政府及大本營の戦争努力の大部が傾注され来つたところである。即ち海軍は連合艦隊の主力を此の作戦に使用した。艦艇の大部が此の方面の戦闘に従事し、投入航空機は約六〇〇〇機以上、作戦参加総人員約一〇〇〇〇〇を算した。陸軍に於ても、勿論その投入兵力と全体兵力との比

0627

率から言へば数分の一乃至十数分の一に過ぎなかつたとは言へ、作戦指導の重点は此の方面に指回せられ、現実の投入兵力も約二七〇〇〇、飛行機約三〇〇〇機を算した。此等の航空機は陸海軍共生産機の一部を次々に投入されたものであつた。又船舶に於ても、民需用の船舶を制限しつゝ、此の方面の作戦の爲に軍用船舶の大部分が使用された。斯くの如き努力に拘らず此の方面作戦は、人員約一三〇〇〇〇（陸軍約九〇〇〇〇、海軍約四〇〇〇〇、但し昭和十九年二月頃迄）、艦艇約七〇隻（二一〇〇〇〇屯）、船舶約一一五隻（約三八〇〇〇〇屯）飛行機約八〇〇〇機（陸海軍共投入機の殆ど全部）の喪失を以て我敗北裡に終りを告げたのであつた。

才十七軍のタロキナ攻撃

昭和十九年三月上旬、南東方面作戦は

八二

0628



ラバウルの完全孤立と共に終り主戦場は後方の絶対国防圏に移りつゝあつた。然るに国防圏前衛線の作戦が將に終らんとするに方り恰も消へなんとする燈火の最後の光の如く此の方面作戦に光明を点じたものは才十七軍主力を以てするタロキナ攻撃であつた。

此の攻撃は、よし大勢挽回は不可能なりとも敵に一矢を報ひなければならぬと言ふ才八方面軍司令官の強烈な意志によつて行はれたものであつた。昭和十八年十一月中旬、才八方面軍が才十七軍をして十分なる準備の後必成を期して攻撃を再行せしむる為め上陸初動の攻撃を中止せしめたことは前述の通りである。才十七軍の攻撃準備は、海軍の協力の下に十二月より開始された。攻撃準備の主なるものはタロキナへの兵站線の推進就中道路の解梁及部隊の訓練であつた。

0629

昭和十九年一月中旬となるやダムピールは既に失陥し、中部太平洋  
マーシャル方面に対する敵の新攻勢も遠からずと判断されるに至つた。  
仍てオ八方面軍司令官は、なるべく早期にタロキナ反撃を開始し以て  
敵を此の方面に吸引するの必要を認め一月二十一日自らボーゲンピル  
島に進出してオ十七軍に攻撃実施を命じた。その後二月十五日敵のク  
リーン島上陸によりボーゲンピル島とラバウル間の大発輸送すら絶た  
れ攻撃準備に多大の支障があつたのみならず、二月十七日トラック空  
襲の結果、オ十七軍は航空の協力を全く期待し得ないこととなつた。  
その上二月初頭にはマーシャル失陥し、敵牽制の目的は既に失はれたの  
であるがオ十七軍は敵撃滅の一途に希望を托して鋭意攻撃準備の完成  
に勉め三月八日より愈々軍主力（オ六師団全力及オ十七師団の歩兵二

大隊基幹の攻撃を開始した。

八五

才一線部隊は同日黎明重点を中央に保持して一挙に敵陣地に突入し戦況は有利に進展した。然し乍ら時日の経過と共に敵は態勢を整へて組織的抵抗を開始するのみならず、戦車及熾烈な迫撃砲火を伴つて逆襲に転ずるに至り、三月十五日攻撃は頓挫した。仍て才十七道は重点を右翼に交換して力攻之努めたが戦況亦進展せず、此の間我損害累加して約七〇〇〇に達した。二十日頃以後は全く形勢逆転し却つて敵の為に壓迫される状況となり攻撃成功の希望は去つた。

三月二十五日、才八方面軍司令官は才十七軍に対し軍主力を以てする攻撃中止の自由を与へた。斯くして才十七軍が成功か然らずんば死かを賭したところのタロキナ攻撃は今一步のところて成功を見ずに終

0631

つた。才十七軍は爾後、主力を以てボーゲンビル島南部、東部及北部を防備し、自活態勢を遂へつゝ、次期作戦を準備するの態勢に移つた。当時の在ボーゲンビル島兵力は才十七軍約三三〇〇〇、才八艦隊約二〇〇〇〇であつた。